



ネピアグラスは、草丈が4倍  
以上になる大型の夏の牧草で

翌春の生存率と再生量、地下部の茎の貯蔵性炭水化物含量

最終刈り 取り時期	生存率 <sup>1)</sup> (%)	翌春の再生量		貯蔵性炭水化物 含量 <sup>2)</sup> (% 乾物)	
		草丈 (cm)	乾物重 (g/m <sup>2</sup> )	12月	2月
10月下旬	52.8	31.1	5.7	3.92	1.70
11月下旬	100.0	53.9	48.6	5.24	3.13
12月下旬	100.0	58.2	68.0	6.97	4.21

1) 株の生存率と再生量の調査は2014年5月21日に実施  
2) 越冬前(12月)と越冬期間中(2月)に調査

## 矮性ネピアグラス多年どり

# 最終刈り取り時期は 11月下旬以降が適当

す。その中に、草丈が1、2倍程度にしかならない小型の矮性(わいせい)種があります。矮性種は一般的な夏の牧草であるソルガムと比べて、茎より

ありました。そこで、安定的に多年利用するための最終刈り取り時期を検討しました。

10月下旬と11月下旬、12月下旬の三つの時期に最終刈り取りを行った場合、10月下旬刈り取りでは翌春の生存率が著しく低下します(表)。

夏の牧草が冬を越して、春に再生するためには、地下部の茎にでんぷんなどの貯蔵性炭水化物を十分蓄積しておく必要があります。10月下旬に刈り取りを行うと、年内の再生によって地下部の貯蔵性炭水化物を消費した状態で、霜に当たって冬を迎えるため、生存率が低下します。

も葉の割合が多く、栄養価も高く、乾物収量が同等で、牛がよく食べます。

矮性種は一度定着すると多年利用できますが、冬の間の一部

の株が枯死するといった問題が

年内の最終刈り取りは、10月を避け、霜が降りる時期の11月下旬以降に行うことで、翌春に高い生存率を示し、多年利用できることが分かりました。矮性種の多年利用で、造成2年以降の作付けが不要となることから、省力的な自給粗飼料の生産が可能となります。

(県農林技術開発センター

深川聡)